

Paul Auster, *Leviathan* における自由の意味について

大工原 ちなみ

1992年に発表されたPaul Austerの作品である*Leviathan*は、ミステリー仕立になっている。とは言っても犯人を特定するミステリーではなく、犯人がなぜその行為に及んだのかという背景を明らかにする謎解きである。全米各地で自由の女神を破壊している連続爆破事件が犯人の自爆という形で幕を下ろしたところから物語は始まる。一人称の語り手であるPeter Aaronにとっては、犯人が親友のBenjamin Sachsであることは明白であるが、FBIにとっては全くの謎である。FBIは早速捜査を開始し、Peterのところにも捜査の手が伸びてくる。彼は親友の生き方が、FBIが捜査すなわち“writing their own story”(8)という行為をすることで、彼らの手で「醜くゆがめられて」伝えられることがないように、「本当の物語」を記すことを決意し、それが*Leviathan*と言う小説になったという形式をとっているのである。それはまたAusterが“The storyteller is a part of the story, even though he never uses the word “I.” (*The Art of Hunger* 以下AHと略す, 317)と述べているように、PeterはSachsの物語を紡ぐ単なる語り手ではなく、彼自身の物語も紡いでいくことも意味している。

Austerも“Mystery novels always give answers; my work is about asking questions.” (AH310)と語っているように通常のミステリーとは異なり、彼の*New York Trilogy*を始めとするミステリー仕立ての小説には、必ずしも謎解きの結果が示されていないことが多い。それは、読者に安易な結末と謎解きの喜びや自己満足を与えるよりも、謎に向かうプロセスや行為そのものを重視しているためであろう。*Leviathan*では一応爆破犯が誰であり、どのような目的でそのような行為に及んだかが明かされているが、そのようなFBI的な結末は重要ではなく、人間の生き様に焦点が当てられていくとき、謎はますます深まっていくのである。そしてその中で鍵となるのは様々なニュアンスを帯びて少しずつ意味を変えながら登場する自由の概念である。

Peter Austerは物語を語るることについて、*The Art of Hunger*のなかで、“At its best, detective fiction can be one of the purest and most engaging forms of story-telling.” (310)とミステリー小説がもっとも純粋な語りの形式であると持ち上げた上で、さらに彼の作品に大きな影響を与えたのは、グリム童話や千夜一夜物語のようなおとぎ話であり、おとぎ話は、“it’s the reader—or the listener—who actually tells the story to himself” (A H311)とあるように、物語を実際に語るのは作者であるのではなく、読者自身であると述べている。

*Leviathan*はミステリー小説の形式をとり、Peterという語り手を用意してSachsの物語を語らせているが、Peterも物語の一部であり、饒舌調の文体でストーリーが進行する現代のおとぎ

話とも言えるこの作品で、真に物語を読み解き語る行為は読者に委ねられている。作品の本質に迫るこの行為を委ねられた読者の一人として、この作品の中で複雑な意味を帯びて繰り返し登場する自由の意味について読み解いていきたいと思う。自由は、The Statue of Libertyや国家との関わりの中で述べられることが多いので、この2つを鍵として見ていきたい。

I The Statue of Libertyをめぐる自由

この作品の主人公である Benjamin Sachs は、最後には全米各地にある自由の女神像を破壊して回るテロリストになったが、その他にも、この作品中には様々な形で、自由の女神そのものやそれに関係の深い人々の挿話がちりばめられている。ここでは自由の女神が持つ様々な側面から、自由との関わりについて探してみたい。

A Mother of Exiles

Paul Auster は、アメリカ同時多発テロ事件の一年後である2002年9月に9.11テロとNew Yorkの意味を問う記事の中で、New Yorkについて、“a living embodiment of what the United States is all about: diversity, tolerance and equality under the law”と述べ、New Yorkを多様性、寛容、法の下での平等というアメリカを具現したものと定義した上で、自由の女神について次のように言及している。

I believe that idea took hold in us when Emma Lazarus's poem was affixed to the pedestal of the Statue of Liberty in 1903. Bartholdi's gigantic effigy was originally intended as a monument to the principles of international republicanism, but "The New Colossus" reinvented the statue's purpose, turning Liberty into a welcoming mother, a symbol of hope to the outcasts and downtrodden of the world. ("The City and the Country" *The New York Times*, September 9, 2002)

The New Colossus すなわち The Statue of Liberty は、正式名称は制作者である Bartholdi 自身が書いた書物の名前から The Statue of Liberty Enlightening the World というが、元来は、自由にたいする共感で結ばれているフランスとアメリカの友好と平和のシンボルであった。また、Bartholdi が、ドラクロワの『民衆を導く女神』と母とをモデルにしたことから、母親の象徴ともなる。

ここで自由の女神の台座に刻まれた詩として名高い、Emma Lazarus の“The New Colossus” (1883) を紹介したい。

Not like the brazen giant of Greek fame,
With conquering limbs astride from land to land;
Here at our sea-washed, sunset gates shall stand
A mighty woman with a torch, whose flame

Is the imprisoned lightning, and her name
Mother of Exiles. From her beacon-hand
Glowed world-wide welcome; her mild eyes command
The air-bridged harbor that twin cities frame.
"Keep, ancient lands, your storied pomp!" cries she
With silent lips. "Give me your tired, your poor,
Your huddled masses yearning to breathe free,
The wretched refuse of your teeming shore.
Send these, the homeless, tempest-tossed to me,
I lift my lamp beside the golden door!"

“The New Colossus”をみればわかるように、ここにはフランスとアメリカの友好は一切謳われておらず、代わりに示されているのは、世界中から自由を求めてやってきた貧しい移民達に手を差し伸べ、アメリカの黄金の門の傍らに立ち、彼らに進むべき道を照らすためにたいまつを手にした、Mother of Exilesの頼もしい姿である。そして更にAusterも指摘しているように台座にEmma Lazarusの詩が刻まれることによって「女神は移民達を歓迎する母に、世界中の追放された人々や虐げられた人々の希望の象徴に変化した」のだ。

*Leviathan*の中でも主人公のSachsは、父方は東欧系ユダヤ人で、母方はアイルランド系でカトリック教徒だが、「1840年代のじゃがいも飢饉と1880年代のボグロムという災難がアメリカへと導いた」と述べている。本国での飢饉や迫害を逃れてアメリカに渡った移民の息子であるSachsの眼にも自由の女神は、世界中から貧しく虐げられた移民を温かく迎え入れ自由を保障するMother of Exilesのシンボルとして映るである。

B The Statue of Libertyをめぐる二人のユダヤ人

現在ではことさらユダヤ系作家という名称を付すことは一般的ではないがPaul Austerは、主人公のBenjamin Sachsがそうであるようにユダヤ系である。*Leviathan*の中にも自由の女神と関わりの深い、Joseph PulitzerとEmma Lazarusという二人のユダヤ人について言及がある。

1 Joseph Pulitzer (1847-1911)

The Statue of Libertyは、アメリカとフランスとの間の友好・平和のシンボルとして、アメリカの独立100周年を祝いフランスのEdouard De Laboulayeが寄贈を提案し、1874年にFrederic-Auguste Bartholdiに制作を依頼し、橋梁技師のAlexandre Gustave Eiffelが骨格を任された。多額の建造費を賄うことができず、資金の枯渇を補うために広く大衆から資金を集めるために、富籤が発売された。1884年7月4日、フランスで完成された自由の女神像がアメリカの全権大

使に公式献呈されるまで漕ぎつける。ところが受け入れ側のアメリカでは、1883年にペドロ島（70年後にリバティ島と改名）で台座の基礎工事が始まりはしていたが、資金と熱意不足のために遅滞として工事は進まなかったばかりか中断されてしまう。

台座の完成を資金面で救うべく登場したのが、当時まだ無名であった Joseph Pulitzer であった。彼はハンガリー系ユダヤ人の移民で、アメリカには1864年にやって来た。北軍兵士やミズーリ州議員を経て新聞業界に進出し、中西部の新聞を次々に買収して傘下に収め、1883年には *the World* を買収してニューヨークに進出していた。新聞の売り上げを伸ばすために、激しい販売競争を繰り広げ、女神の台座建設のための10万ドル基金キャンペーンを展開し、それを発行部数の増大に利用する作戦に出た。富裕層からの寄付がなかなか進まなかったため、フランスで富籤という形で一般大衆からお金を集める形が成功したのをヒントに、たとえわずかな額でも寄進した者はすべて新聞紙上に名前を載せるキャンペーンを繰り広げる。これに対して特に子供たちが応募し、quarter (25セント玉) を中心とする寄付が集まった。彼は、当初のもくろみ通り発行部数を大幅に伸ばし、台座の建設費用のすべてを賄うには程遠いにせよ、かなりの額を集めることができた。

Pulitzer と女神像の関係を見るとき、1883年という年に再度注目してみたい。この年はペドロ島で女神像の台座の基礎工事が始まった年であり、彼が *the World* を買収してニューヨークに進出し、新聞業界で地歩を固めつつあり、さらなる飛躍を目論んでいた時期である。またこの年、Bartholdi が自由の女神の台座を作成するためにアメリカ側で行った資金集めに協力するために Emma Lazarus が、“The New Colossus” という詩を書いた年でもある。Pulitzer 自身が移民であったことから、Mother of Exile は移民である彼を温かく受け入れ、彼にアメリカの夢の実現という希望の灯火を掲げてくれる存在であった。また、台座の資金集めキャンペーンという形で、彼は新聞王としての地位を築き上げていったのであるから、女神像は彼に成功をもたらしてくれたと言っても過言ではない。

また Pulitzer を離れて考えてみた時、一般大衆の浄財から台座のかなりの部分ができたことは、フランスとアメリカという国家間の友好のシンボルというよりも、移民や貧しき者、虐げられた者の味方としての女神という性質が形成されていく契機にもなったといえよう。自由の女神は、そういったアメリカの一般大衆にアメリカの夢という希望を掲げ、自由を保障する存在となったのである。

2 Emma Lazarus (1849~1887)

Emma Lazarus は、女神像の台座に刻まれた“The New Colossus”の詩によって、自由の女神を移民を温かく迎え彼らに希望を与える母として、移民と密接に結びつけた詩人である。彼女は、Sephardim と呼ばれる南欧系のユダヤ人であった。彼女の一族は植民地時代からニューヨーク

に住み、父親は砂糖商人として成功しており、彼女に家庭教師を付けて教育している。彼女が学んだのは、アメリカやヨーロッパの文学や言語、神話学、音楽等であった。1866年に最初の詩集を出版する早熟な詩人であったが、初期の作品には、*Admetus and Other Poems* (1871) に収められた、“In the Jewish Synagogue at Newport” にユダヤ人への言及が見られるだけで、基本的にはヨーロッパ文学のテーマやスタイルを踏襲しユダヤ人意識はほとんど無かった。

しかし1880年代に入り、ロシアで pogrom と呼ばれるユダヤ人に対する虐殺行為が頻繁に行われるようになり、それを逃れるために多量のユダヤ人が、ロシアや東ヨーロッパから、アメリカを目指し移民としてやって来ていることを耳にすると、彼女の中にユダヤ人としての意識が確固たるものとして芽生えていくことになる。そしてこの時期は彼女が作家としてもっとも多作で優れた作品を書いた時期とも重なるのである。

1882年に彼女は、*Songs of a Semite: The Dance to Death and Other Poems* を発表している。タイトルを見ても明らかなように、この詩集はセム語族であるユダヤ人を強く意識したものである。“The Dance to Death”は、儀式殺人の汚名とともに古くからユダヤ人迫害の有力な根拠となってきた、「黒死病が流行ったのはユダヤ人が井戸に毒を投げ込んだから」と言ういわれなき言いがかりをテーマにしている。場面は1349年のペストの流行に喘ぐドイツであり、町の水源に毒を入れたから伝染病が蔓延したという汚名を着せられたユダヤ人達が、Thuringia州のNordhausenで虐殺された悲劇を扱ったものである。

また、“The Crowing of the Red Cock”には、pogromを思わせる光景が描かれている。

Across the Eastern sky has glowed
The flicker of a blood-red dawn,
Once more the clarion cock has crowed,
Once more the sword of Christ is drawn.
A million burning rooftrees light
The world-wide path of Israel's flight.

さらに彼女の怒りの矛先は、愛を説きながら古来ユダヤ人に対して迫害を続けてきたキリスト教徒に向けられる。

When the long roll of Christian guilt
Against his sires and kin is known,
The flood of tears, the life-blood spilt
The agony of ages shown,

What oceans can the stain remove,
From Christian law and Christian love?

このように彼女の中に、ユダヤ人迫害にたいする怒りとユダヤ人としての意識が芽生えつつあった1883年に、Bartholdiが自由の女神の台座を作成するために行った資金集めに協力するために、彼女が書いた詩が“The New Colossus”なのである。この詩は“Catalogue of the Pedestal Fund Art Loan Exhibition at the National Academy of Design”にも印刷され、当時台座のために資金が集まっていなかった状況を打開するための、国民意識の高揚の目論見にも利用された。自由の女神は、フランス側が女神像を作成し、それを支える台座をアメリカ側で作ることによって、両国の共同作業のニュアンスを高め、フランスとアメリカとの友好のシンボルとする予定であった。それが1903年にLazarusの詩が台座に刻まれたことによって、つないでいた鎖を断ち切ったばかりの女神像の右足や右手のトーチに示されているとおり、すべての弾圧や抑圧からの解放とすべての人間は自由で平等であることのシンボルへと変わったのである。奇しくも、彼女自身もこの詩の作者として後世に名を残すことになる。

以上、PulitzerとLazarusという二人のユダヤ人は、The Statue of Libertyを通して地位を築くとともに、国家間の友好のシンボルであったThe Statue of Libertyを、民衆の自由のシンボルへと変容させるのに手を貸したのである。

C *The New Colossus*

*The New Colossus*は、*Leviathan*のstory within storyであり、Benjamin Sachsが書いた唯一の長編小説という設定になっている。Sachsの兵役忌避の経歴と小説が刑務所で書かれたいきさつから、単純に予想されるようなベトナム戦争や牢獄に関係した話ではないと断った上で、1876年から90年までのアメリカを舞台にする歴史小説であり、史実に基づいて書かれたと紹介される。登場人物の大半は、Walt WhitmanやSitting Bull, Ellery Channing, Sherman将軍といった歴史上実在する人物であり、彼らの存在がAusterの他の小説同様、ストーリーにリアリティを付与している。その他は*Moby-Dick*のIshmaelといった小説の主人公たちで占められている。

この小説のタイトルは、Lazarusの“The New Colossus”という詩と同じタイトルであり、自由の女神を指し示していることは言うまでもない。それだけでなく登場人物の中には、Emma Lazarus, Pulitzer, Bartholdiといった自由の女神ゆかりの人物たちも含まれている。Sherman将軍までthe American Committee on the Statue of libertyから、女神像の設置場所を、ガヴァナーズ島かペドロール島(Liberty Islandの旧称)のどちらにするか決定するように要請された人物として紹介されている。

その中で、LazarusとEmersonについてのエピソードをピックアップしてみたい。まず史実

を簡単に述べると、1866年18歳の時に *Poems and Translations: Between the Ages of Fourteen and Sixteen* を出版したのを機会に、LazarusはEmersonに会い、二人の文通は1882年にEmersonが死ぬまで続く。彼女はEmersonを師と仰ぎ、1871年に2作目を出版したときには、それを彼に捧げている。しかしEmersonは彼女の詩を、1874年に出した *Parnassus* というアンソロジーに収録しなかったため、彼女は手紙で怒りを伝えている。結局、1876年にLazarusがコンコードにEmersonを訪ねて和解する。

The New Colossus にはこのエピソードが盛り込まれている。そこではLazarusがコンコードのEmerson邸を訪問し、そこで出会ったEllery ChanningにThoreauゆかりのWalden Pondに案内される。二人の友好はその後も続くが、最後に出会った時に、彼はLazarusにThoreauのポケットコンパスを贈る。元来はThoreauがメーン州の森の中に分け入った時に道を見つける道具であったコンパスだが、もはやThoreauは世を去り、指針を示してくれる人がいない今、この意味を作者は、“America has lost its way. Thoreau was the one man who could read the compass for us, and now that he is gone, we have no hope of finding ourselves again.”(43)と、人々が自己を見失い方向性を失ったアメリカの現状を嘆くものと解釈している。作者がこの状況を小説の舞台である、1980年代に重ねて述べていることは言うまでもないことであろう。19世紀の女流詩人のエピソードにこと寄せて、コンパスのないまま危険な方向へと動きつつあるアメリカにたいする批判と警鐘が示されているのである。

更に重要なことは、*The New Colossus* が牢獄の中で書き始められた小説であるという点である。彼は、招集されたときに入隊を拒んだ。「QuakerやSeventh-Day Adventistでなかったため」に良心的兵役拒否も認められなかった。“... the fact is I'm not opposed to all wars. Only to that war.”(22)と語っているように彼が拒否したのは、60年に始まったベトナム戦争である。多くの若者が、カナダやヨーロッパに逃亡する中で、彼は、“I didn't want to run away. I felt I had a responsibility to stand up and tell them what I thought.”(22)と行って逃亡することなく自分の行動の責任をとる道を選び、その結果、逮捕されて牢獄へ入れられ、そこで小説を書き始めた。自由を守るために自由を剥奪される牢獄へ入れられるという皮肉な結果になったのである。

しかし、この牢獄という束縛の最たるものと考えられる世界の中であって彼はむしろ、“You'd be surprised how much freedom that gives you.”(22) “The boundaries of my world had shrunk, but I was still alive, and as long as I could go on breathing and thinking my thoughts, what difference did it make where I was?”(23)と語っているように、精神的自由を謳歌しながら、*The New Colossus* を書き始めた。当時彼は23歳であったが、その後5年を費やして、7、8回書き直しながら、436ページの大作を書き上げたのである。

The New Colossus は、主人公のSachsがベトナム戦争に反対したために、Thoreauがそうであったように、牢獄に入れられた時に書き始められた物語である。Sachsは自由を守るために投獄

され、通常では自由を剥奪されたと考えられる環境の中で、自由の女神が掲げる松明のように自由を標榜し守り続けたのである。

D 自由の恐ろしさ

Sachsは、兵役に就かない自由を守るために牢獄に入り、また牢獄の中で自由を「謳歌」したのとは裏腹に、自由の恐ろしさも痛感している。*Leviathan*の中で、感謝祭のパーティの折に、1951年にSachsが母たちと自由の女神を見に行った時のことが話題に上る。

まずSachs親子は服装のことで対立する。Sachsの母は、“Visiting the Statue of Liberty isn’t like playing in the backyard, . . . It’s the symbol of our country, and we have to show it the proper respect.”(37)と、自由の女神はアメリカのシンボルであり、敬意を払わなければいけないのだから、よそ行きの半ズボンに白いハイソックスで行かなければならないと諭す。一方Sachsは“There we were, about to pay homage to the concept of freedom, and I myself was in chains. I lived in an absolute dictatorship, and as long as I could remember my rights had been trampled underfoot.”(37)という言葉にもあるように、自由の概念に敬意を表しに行くために鎖でがんじがらめになっている状態を皮肉に感じていた。自由の女神の足下には解き放たれたばかりの鎖がまだ生々しく残っているのに、Sachsを束縛してきた鎖はまだ解かれていなかったのである。

これに対してSachsは、自らに科せられた鎖を外す賭に出る。正装ではなく、Tシャツにデニムにスニーカーで行くことを主張し、もし一緒に行くMrs. Sapersteinの子供たちが、同様にラフな格好をしていたら、今後は自由に何を着ても良い許可をもらう約束を取り付け、実際にその権利を勝ち取るのである。彼自身“It was the first major victory of my life. I felt as if I’d struck a blow for democracy, as if I’d risen up in the name of oppressed peoples all over the world.”(37)と述べたように、生まれてからずっと「絶対的な独裁制の下で権利を踏みじられながら生きてきた」彼が、自由に生きる権利を勝ち取った瞬間であった。

しかしこれはSachsが母親と自由の女神を訪れ、単に服装の自由という最初の自由を手に入れた話にとどまらなかった。それは同時にSachsが最初に自由の恐ろしさを知ったエピソードともなる。女神像の王冠まで登り終えて帰ろうとしたのを子供たちがせがんで更に上の松明の先まで登ることになる。ところが、今度は狭い上に手すりもなく、母は今にも下まで真っ逆さまに落ちていくのではないかという恐怖のあまり、力が抜け氷汗がでて吐きそうになりその場に座り込む。“But nothing was going to make me stand up on those stairs again. I’d have sooner jumped off than allow myself to do that.”(39)というこの母のコメントは、自由の女神のただ中で恐怖に捕らわれたことから、自由の恐ろしい側面を象徴的に著していると同時に、後にSachsが落下事故を起こす伏線にもなっている。またここには、上り詰めたら落下するしかないというAuster流のテーマも如実に示されている。それ以来彼女は高所恐怖症になる。ここから

Sachsは、“I learned that freedom can be dangerous. If you don't watch out, it can kill you.”(39)と述べているように、彼は自由の女神訪問によって、自由を手に入れたと同時に、自由が併せ持つ恐ろしさの洗礼を受けることになったのである。

E アメリカのシンボルとしての自由の女神

The Statue of Libertyは、1924年にアメリカ合衆国国定記念物、66年には国家歴史登録財、84年には、世界遺産に登録されており、アメリカそのもののシンボルとなっている。アメリカ人でなくてもアメリカという言葉聞いた時に、自由の女神像を思い浮かべる人も多いことだろう。

*Leviathan*では、主人公であるSachsが、全米各地にあるThe Statue of Libertyのレプリカを爆破してまわるストーリーになっている。なぜレプリカを次々に破壊し続けたのか、その理由を読み解くために、自由の女神像のレプリカについて考察してみたい。

もっとも有名で由緒あるレプリカは、自由の女神像の返礼として、フランス市民に贈られた、パリのセーヌ川に立つ“The French Statue of Liberty”であろう。合衆国以外では、Bartholdiの故郷に2004年に建てられた像を始め、オーストリア、ドイツ、イタリア、ブラジル、日本（東京のお台場の女神像など）、ベトナム、中国にもレプリカは存在する。

この中で、最後の中国のものは、特殊であり、厳密に言えば自由の女神像を模した「民主の女神像」となる。1989年4月の胡耀邦の死を契機として民主化を求めて学生や市民たちが天安門広場に集まったが、その際、北京美術学院の学生によって作成された「民主の女神」像が、広場の中心に置かれた。この女神像は民主化運動のシンボルとして世界中にその映像が流された。天安門事件は、結局は武力弾圧によって民衆による民主化の動きを封じ込めた形で終結した。女神像も弾圧を受け無残な姿を世界中にさらした後、撤収された。ほぼ同時期に、アメリカのワシントンD.C.の中国大使館近くの公園に民主の女神のコピーが作られて、自由を求め渴望する中国の民主化活動家たちとアメリカ市民の連帯のシンボルとして展示された。*Leviathan*の中でも天安門事件への言及がみられるが、この件については後述する。

本家のアメリカでは全米各地で見ることができる。最も多いのは、1950年にボーイスカウト50周年を記念して、“Strengthen the Arm of Liberty”のテーマで祝った際に、200あまりのレプリカが作成されて全米各地に建てられたものである。他は、商業的な意味合いの強いもので、たとえば、Statue of LibertyやLiberty Tax Service、Liberty National BankといったLibertyと言う名前を持つ会社名を宣伝するために建てられたものである。ラスベガスのNew York-New York Hotelにあるレプリカの場合、ブルックリンブリッジのレプリカもあることから、自由と言うよりは、New Yorkの雰囲気醸し出すための小道具としても使用されているようである。

以上のように自由の女神本体がそうであるように、自由の女神のレプリカもまた、アメリ

カのシンボルであり、Austerが述べていたように、女神が置かれたNew Yorkもまた、多様性・寛容性・法の下の平等というアメリカを具現したもの」なのである。

以上自由の女神と自由の関わりについて述べてきた。Bartholdiが自由にたいする共感で結ばれているフランスとアメリカの友好と平和のシンボルとして制作し、Bartholdiが母とドラクロワの『民衆を導く女神』をモデルにしたことから、母親のシンボルでもあったThe Statue of Liberty Enlightening the Worldは、Pulitzerによる経済的貢献とEmma Lazarusの詩によって、世界中から貧しく虐げられた移民を温かく迎え入れるMother of ExilesのシンボルとしてのThe Statue of Libertyになる。更に意味を広げていき、すべての弾圧や抑圧からの解放とすべての人間は自由で平等であることのシンボルや自由の国アメリカそのもののシンボルとなっていく。そしてその自由とは、自由の女神の台座内部に掲げられたBenjamin Franklinの“*They that can give up essential liberty to obtain a little safety deserve neither liberty nor safety.*”の言葉にあるように、容易に得られるものではなく、常に恐ろしさを内包し、表面的な自由を捨て去ることによってのみ得ることができる本質的な自由なのである。

II 自由と国家

A Leviathan

*Leviathan*は語り手のPeterによってFBIへの報告書の形で書かれたこの小説の題目であるとともに、Sachsが書きかけていた本のために予定されていたタイトルでもある。*Leviathan*とは元来、旧約聖書に出てくる巨大な幻獣であり、「ヨブ記」41章ではワニと訳されている。エジプトでワニは抑圧者の象徴であり、野獣の王者であり、神を除いて最強のものであるリヴァイアサンは、ユダヤ民族を悩ますこの世の様々な力の象徴であった。

旧約の*Leviathan*と並んでこのタイトルが暗示しているのは、Thomas Hobbes (1588-1679)の古典的名著である*Leviathan*である。この書において、最強のものとは国家を指している。Hobbesによれば、人間は自然状態では、自己保存の本能に従って「自然権」を行使し、自由を享受する。しかしその結果、*bellum omnium contra omnes*すなわち「万人の万人に対する戦い」という闘争状態が生じ、自然権は否定せざるを得ない。そこで、自然権を制約し代わりに社会契約による絶対主権を行うために国家が存在するというのである。ただこれは暴君的な絶対君主による権力乱用を進めたものでは決してなく、あくまで社会契約を守るために国家権力による法の支配が必要なのであって、彼が、自然法の内容に反する市民法を無効としていることからわかるように、根底では自然法すなわち人間の権利を重視している。哲学事典には、「そこに理性が、自ら発見する自然法によってこの自然権を制限し、社会契約による絶対主権の設定へと導く。かくして国家が成立するのである。彼はこの国家契約説によって専制君主制をもつ

とも理想と考えたが、主権は自然権の保証を義務とする限りにおいて絶対なのであり、主権の絶対性の基礎を人民の自己保存権においた点でそれは純粋に徹底した自然主義の政治理論であるといえる」と記されている。国家は単に絶対的な権力を持つものであると同時に、人間の権利を保障するものでもあるのだ。

Paul Austerの*Leviathan*のプロローグには、“Every actual state is corrupt.”というRalph Waldo Emersonの言葉が掲げられているが、ここには、本来個人の権利を守ることを第一に考えるべき国家が、逆に個人の権利を剥奪していることに対するAusterの痛烈な非難のメッセージが込められていると考えることができよう。自由の女神の台座の内部には、様々な偉人たちのメッセージも掲げられている。その中で、Emersonは、“For what avail the plough or sail, Or land or life, if freedom fail?”と述べ、また、Woodrow Wilsonは、“I would rather belong to a poor nation that was free than to a rich nation that had ceased to be in love with liberty.”と、それぞれ国家が自由を保証することの大切さを述べている。

B civil disobedienceの伝統とアメリカの右傾化・暴力化

アメリカには、国家による自由と人権の抑圧に対して非暴力で闘った、Thoreauのcivil disobedienceに始まる良心に裏打ちされた不服従の伝統がある。

Henry David Thoreau (1817-62)は、Emersonがペンのみを用いて主張したことを行動でも示した人物であるといえよう。自然を愛し森の中での生活を*Walden, or, Life in the Woods* (1854)に著したThoreauは、1846年に人頭税滞納の罪状で逮捕され投獄される。彼は奴隷廃止論者であり、実際に逃亡奴隷を救う活動もしていた。当時アメリカはアメリカ＝メキシコ戦争(1846-48)のただ中にあり、領土の拡張すなわち奴隷州を増やす目論見が進行中であった。そのような政策に自分が支払った税金がわずかでも使われることは、Thoreauにとっては耐え難いことであった。“Under a government which imprisons any unjustly, the true place for a just man is also in prison.”と語り、自ら進んで牢獄に居場所を求めて投獄された彼の主張は“Civil Disobedience”(1849)としてまとめられる。

この中でThoreauは、個人は政府よりも優位な立場にあり、個人の内面は政府の権威により犯すことができない聖域であり、政府が民意を顧みず勝手に不正な行為をするなら、個人は政府と手を切る権利があると主張する。これは、Hobbes流の主権の絶対性の基礎を人民の自己保存権においた点で、純粋に徹底した自然主義の政治理論の流れをくむものと考えられよう。この考え方は、20世紀になるとアメリカのみならず世界中の民主主義運動へとつながっていく。

また、60年代のアメリカで、Martin Luther King牧師は、civil disobedienceの伝統に沿った非暴力手段で公民権を勝ち得ていった。この動きは戦時にも見られる。第二次世界大戦中

は、35万人が戦争を忌避し、実際4万人以上が入隊を拒否している。ベトナム戦争の際にも、Sachsのように良心的兵役忌避者が大勢おり、カナダやアメリカへ逃亡するものが後を絶たなかった。

Sachsの政治的な活動も煎じ詰めていけば、“a matter of conscience”(29)であり、それはさかのぼれば、19世紀の超越主義者であるThoreauにつながる。実際彼は、“Thoreau was his model, and without the example of ‘Civil Disobedience,’ I doubt that Sachs would have turned out as he did. I’m not just talking about prison now, but a whole approach to life, an attitude of remorseless inner vigilance.”(29)とPeterに語らせているように、SachsはThoreauに心酔し、彼がひげを生やしていたからという理由でひげを生やし、彼と同じく44歳で死んだほどである。

Thoreauは暴力的な手段を執ることはなかったが、そのためかえって内面では激しい怒りが渦巻いていた。この点はSachsと共通している。“In spite of his gentleness, Sachs could be rigidly dogmatic in his thinking, and there were times when he let loose in savage fits of anger, truly terrifying outbursts of rage.”(20)とあるように、彼は表面的な穏やかさとは裏腹に激しい怒りが噴出する時があったのである。

徴兵を拒否した結果入れられた牢獄の中で書いた彼の著書である*The New Colossus*についても、“The dominant emotion was anger, a full-blown, lacerating anger that surged up on nearly every page: anger against America, anger against political hypocrisy, anger as a weapon to destroy national myths.”(44)と、Peterは分析しており、アメリカという国家や政治的偽善性に対するSachsの怒りは募っており、そしてそれが直接的には、ベトナム戦争を続けるアメリカにたいする怒りとなって噴出したことが示唆されている。

Sachsが兵役拒否で裁判にかけられた際に、自宅に押しかけた報道陣に向かって反体制側の人間である父親は、普段の寡黙さを打ち破って、“Ben is a terrific kid. We always taught him to stand up for what he believes in, and I’d be crazy not to be proud of what he’s doing now. If there were more young men like my son in this country, it would be a hell of a lot better place.”(30)と抗議し、息子の生き方を認めている。

これに対してアメリカはどう応えていたか。Sachsの父は、1930年代に社会主義者として政治活動に関わっていたという設定になっているが、20世紀初頭に社会主義運動ストライキやデモが行われた際には、スト破りが用意されただけでなく、暴力的な制裁が行われた。第一次世界大戦時には、戦争に反対したり、徴兵を拒否する者はスパイ法によって禁固刑にされた。第二次世界大戦後でもTrumanに忠実でないものを審査するための委員会が設立されていわゆる赤狩りが行われた。その結果が暴力の出現である。60年代はKing牧師のsit-in demonstrationのような非暴力運動が成功を収めたかに見えたが、平和的に運動を進める人々にも容赦なく暴力の嵐が降りかかり、King牧師は暗殺され、Los AngelesのWatts暴動をはじめ、全米の黒人ス

ラム街で暴動が発生し、黒人の非暴力運動もまた暴力に取って代わる。Rachel Carsonによって始められた環境保護運動のように全く暴力とは無縁と思われた環境保護運動ですら、暴力をはらむエコ・テロリズムの出現を許すことになったのである。

自由という言葉に対するアメリカの支配階級の拒絶反応について、当時のアメリカでなぜ自由の女神像の台座への寄付金が富裕層から集まらなかったのかと言う分析に絡めて、小田基氏は次のように述べている。

「自由」大賛成一自分にとって、家族にとって、友人にとって。しかし、「自由」が広範囲の人々のあいだに、しかも度を越して広まるならば……。

(このような「自由」にたいするアメリカの支配階級の見方の一般的かつ顕著な表れを、ぼくたちは、後年1920年代に見る。出版物の検閲・弾圧、赤狩り、合衆国憲法修正第18条（禁酒法）等々に）

また、一方、彼らには、社会的責任感が育っていなかった。社会、あるいは他者のために、自ら苦勞して蓄積したお金を割くことは苦痛以外の何物でもなかったのである。

かれらは、「自由」についての話題を避けた。像についても「自由」という名がついているがゆえに。 『「自由の女神」物語』 182

当時のアメリカの富裕層にとって、自由とは下層階級の台頭をもたらし、自らの地位を危うくする危険な思想に他ならなかったのである。それはSachsが危惧する自由の危険性とは性質を異にするものである。

自由という言葉が本来の意味とは異なる意味に変容する危険性は、*Leviathan*の舞台となっている1980年代のアメリカにも見られる。80年代に入り、Carter大統領から俳優協会会長として赤狩りにも協力していたReagan大統領に代わる頃、右傾化は顕著になる。1985年レーガン・ドクトリンのもとで、アフガニスタンやニカラグワ等で反共運動を、「自由の戦士」が支援していくようになる。それは単に大統領の交代だけではなく、民主党から多量の議席を奪った共和党が上院で多数派になったことにも現れている。小田氏が述べていた1920年代の「アメリカ支配階級の一面的な自由の見方」がここに再び顕著になってきたのである。この時期について*Leviathan*には次のように記されている。

The era of Ronald Reagan began. Sachs went on doing what he had always done, but in the new American order of the 1980's, his position became increasingly marginalized. It wasn't that he had no audience, but it grew steadily smaller, and the magazines that published his work became steadily more obscure. Almost imperceptibly, Sachs came to be seen as a throwback, as someone out of step with the spirit of the time. The world had changed around him, and in the present climate of selfishness and intolerance, of moronic, chest-pounding Americanism, his opinions sounded curi-

ously harsh and moralistic. 116-7

右傾化が進み、ジャーナリズムも沈黙を強いられ、反対の声を上げることが“bad manner”とされるようになったアメリカの潮流に異を唱えようとするSachsは、時代遅れと見なされ周辺に追いやられる。厄介者扱いされながらも彼は声を上げ続けるが、その姿は、Peterの眼に、“He pretended not to care, but I could see that the battle was wearing him down, that even as he tried to take comfort from the fact that he was right, he was gradually losing faith in himself.” (117)とSachsが闘いに敗れ自信を喪失していくプロセスと映る。その失われつつあったSachsの自信を回復させてくれるはずであった、*The New Colossus*の映画化も頓挫し、彼はいよいよ窮地に追い込まれていくのである。

本来個人の自由を保証すべき、巨大な権力を有する国家は、現代のアメリカではその権力をむしろ個人の自由を抑圧し制限する方向へと動いている。その中で、真の自由を守ろうとするSachsは社会の周辺へ追いやられ、生きる目的と自信を喪失しているのである。

III The Statue of Liberty 爆破と国家への挑戦

A 落下事故

1986年7月の段階でPeterは、初めて出会ったときには、「寛大でユーモアに富み知的」であったSachsが、“In fifteen years, Sachs traveled from one end of himself to the other, and by the time he came to that last place, I doubt he even knew who he was anymore.” (15)と15年の間に、180度人間が変わってしまったと述べている。その根本的な変化をもたらしたのが、落下事故なのである。

それは、1986年7月4日の自由の女神建造百年祭の日であり、言うまでもないことだが、アメリカの独立記念日に開かれた、出版関係者のパーティの最中に起こる。Peterは、妻のFannyと話しながら花火を見ている。彼らの眼前には、「自由の女神が、遠く港の左手にライトアップされて輝くばかりに」立っている。かつて1951年にSachsが母と自由の女神を訪問した体験は、Sachsの母が落下の危険性におびえ、Sachsが自由に内包される危険性を初めて知った原体験であった。二人は女神を見ながらSachs等が訪問したときのことを話題し、「自由の女神像の中を落ちたらどうなるのだろうか」などと笑い合っていたのである。

その直後に、Sachsは非常階段の踊り場から落下し重傷を負い人間が変わってしまう。Sachs自身、その落下はその日初めて会ったMariaの気を引き自分の体に触らせたいという卑しい下心を抱いたことに対する罰と考えるだけでなく、その真の目的は「自分の生命を危険にさらす」ことであり、“I learned that I didn’t want to live. For some reasons that are still impenetrable to me, I climbed onto the railing that night in order to kill myself.” (135)ともはや自分は生を望まないことに気づいたから、手すりの上に立つような危ない真似をしたのだと告白する。そして、誰にで

も死の本能はあると慰め、また人生を変えることは人生に終止符を打つこととは異なると反論する Peter に彼は次のように答える。

“I want to end life I’ve been living up to now. I want everything to change. If I don’t manage to do that, I’m going to be in deep trouble. My whole life has been a waste, a stupid little joke, a dismal string of pretty failures. I’m going to be forty-one years old next week, and if I don’t take hold of things now, I’m going to drown. I’m going to sink like a stone to the bottom of the world.” (136-7)

踊り場から地面に激突したことに象徴されるように、人生のどん底を打ったことを Sachs は意識している。しかも彼は41歳という人生でリセットが効かない年齢に達しつつあり、「このまま石ころのように世界の底に沈み込んでしまいたくない」という焦燥感に苛まれている。彼の目には今までの全生涯が無駄であり、小さな失敗の連続としか映らなくなったのである。そのような状況を打開するために Sachs は、“I don’t want to spend the rest of my life rolling pieces of blank paper into a typewriter. I want to stand up from my desk and do something. The days of being a shadow are over. I’ve got to step into a real world now and do something.” (137) と自分で述べていたように、書くことを辞め、机を離れ現実を見据えて何かをしたいと考えるのだが、彼のその思いはやがて、自由の女神像の連続爆破という行動となっていく。

この後、彼は一切執筆活動を断ち、事件を忘れないためにひげを剃り、事故でできた傷跡を顕わにし、事故当時一緒にいた Maria と接触し続ける。逆に妻の Fanny とは距離をとり始め、ついには仕事を名目に自らバーモントの別荘へいき、別居という形で妻と別れる準備を着々と進めていく。Sachs は7月4日というアメリカにとって新生を意味する独立記念日に、どん底まで落ちたそれまでの人生に別れを告げ、思索的な作家からアクティブなテロリストへの道を歩み始めるのである。

B テロリストへの道

まず、Sachs が自由の女神のレプリカを片端から爆破して回るようなテロリストになった経緯について簡単に触れておきたい。秋の訪れに誘われるように Sachs は一時執筆の手を休め、散歩に出かけるが、森の中で道に迷ってしまう。コンパスなしでは自分の位置がわからず方向を見失うという記述は Thoreau のコンパスのエピソードを想起させる。あたかも自分の生きている世界で生きる位置を見失っている彼自身の状況を象徴的に示すような事件でもある。一夜を森の中で明かした後、Dwight という気の良い若者に助けられ自宅まで送ってもらう途中、山中で一人の男と出会う。Dwight は彼についても手助けしようと申し出るが、いきなり男に銃で撃たれ亡くなる。その男を Sachs はバットで打ち殺し、現場を離れるが、持参した男の荷物から Reed Dimmagio という彼の名前を示すパスポートと爆弾の材料、多額の現金が見つかる。転がり込んだ Maria のところで、殺した Dimmagio が、彼女の親友である Lillian の夫であるこ

とが判明する。

Dimmagioはベトナム戦争に従軍した後、復員兵援護法を利用して大学を卒業するとパークレーの大学院に進みアメリカ史を専攻。Lillianと結婚しMariaという女の子が生まれるが、New Yorkで売春をしていた彼女の過去がわかり、また彼の方も過激派と付き合いようになって陰気な人間に変わり別居。Dimmagioは博士号取得後、私立大学で教えていたが、失踪し、バーモントで殺害されるまでの2年間は空白とされている。事件について*Chronicle*に載っていた情報からDimmagioが、原子力発電所や製材会社といった「地球から略奪するもの」の閉鎖を求めて活動している左翼系の環境団体“Children of the Planet”の一員であり、“a crazed idealist, a believer in a cause, a person who had dreamed of changing the world” (191)とあるように、世界の変革を夢見、その成就のためには手段を選ばない理想主義者であることがわかったのである。事情を知ったSachsはDimmagioの金を未亡人となったLillianに渡すためにカリフォルニアへ行く。

当然のことながらLillianに好意的に迎えられた訳ではなかったが、奇妙な同居が続くうちにSachsはDimmagioの論文を読む機会を持つ。それは、ロシアから移民してきたユダヤ系の無政府主義者Alexander Berkmanに関する論文であった。本の中で、Berkmanは1892年の鉄鋼ストライキの際に労働者に向かって発砲させた資本家であるFrickを銃で抹殺しようと試みて逮捕され14年刑務所で過ごし、*Prison Memoirs of an Anarchist*を書き、出所後はアナキスト系の雑誌*Mother Earth*の編集をEmma Goldmanと務め、あげくには彼女共々国外追放になりロシアへ行くが、幻滅しフランスで晩年を送り最後は銃で頭を撃ち抜いて自殺したと紹介されている。Dimmagioの論文からSachsは、彼が、「ある形式の政治的暴力には道徳的正当性があると信じて」(252)おり、暴力やテロを容認する考え方をとっていたことを知る。

また、Sachsは、Dimmagioとの出会いには、“a kind of cosmic attraction” “the pull of some inexorable force” (252)が働いたのであり、その必然性を確信する。Sachsと彼は基本的には同じ方向を向いており、本人も口にしてるように、出会い方が違っていれば友人になれたかもしれないのであったのである。Dimmagioは兵士として、またSachsは徴兵忌避者として立場は異なるものの、二人ともベトナム戦争に関与しそれをきっかけにして同じ考えに至ったからである。

We'd both become writers, we both knew that fundamental changes were needed—but whereas I started to lose my way, to dither around with half-assed articles and literary pretensions, Dimmagio kept developing, kept moving forward, and in the end he was brave enough to put his ideas to the test. It's not that I think blowing up logging camps is a good idea, but I envied him for having the balls to act.(252)

それは「何かするために指一本動かしたことが無く、過去15年間ただ文句を言ってきた」だけの自分を「偽善者」として恥じ、木材伐採員宿泊所の爆破行為は感心しないものの、その間、

進化し前に進み続けていた Dimmagio に Sachs が心酔していくプロセスでもあった。

当初は、Dimmagio について書くことで、命を奪った彼を“生かし”挽歌を捧げるつもりだった。しかし Sachs はある日知人から身を隠すために飛び込んだ古本屋で、自著の *The New Colossus* を見かける。それがもはや誰も欲しがらなくなった本の「墓場」に置かれているのを見たのである。その時彼は、本を書くことの無意味さを思い知ると同時に、本の表紙に描かれている奇妙にゆがんで描かれている自由の女神像を見ているうちに、自由の女神像のレプリカを次々に爆破していく計画を思いつくのだ。それは、“Not only would I be using it to carry out Dimaggio’s work, but I would be using it to express my own convictions, to take a stand for what I believed in, to make the kind of difference I had never been able to make before. All of a sudden, my life seemed to make sense to me.” (256) そして “I felt free again, utterly liberated by my decision.” (256) とあるように、単に机上ではなく Dimmagio が成し遂げようとしていたことを引き継ぐことであり、しいては自分の確信することを表明する行為でもあった。やっと生きる意義を見いだした Sachs は、この上ない幸福感で満たされるのである。

実は Sachs は、生まれたときからすでに爆弾と深い関わりがあったという設定になっている。彼は 1945 年 8 月 6 日に生まれており、自らを “America’s first Hiroshima baby” (25) あるいは “the first white man to draw breath in the nuclear age” (25) と呼び、Enola Gay の腹から Fat Man (これは長崎に投下された原子爆弾で、広島に投下されたのは Little Boy であるが、作者が歴史的事実を誤認している) が投下された時に生まれたことをあえて強調している。彼はそうすることで、「自分の時代の恐怖に自身を関与させ」(27) で、“Once we acquired the power to destroy ourselves, the very notion of human life had been altered; even the air we breathed was contaminated with the stench of death.” (27) と述べているように、原爆のような人類を破滅をもたらすような武器を国家が所有するようになり、人類が死と隣り合わせで生きようになった時代の恐ろしさを強調したのである。

1988 年 6 月 16 日にオハイオ州ターンブルの裁判所前で、またその 6 日後には、ペンシルベニア州ダンバークでそれぞれ自由の女神のレプリカが爆破された。ただ自由の女神が国家のシンボルであったことから批判の声が上がる。作品中にも書かれているように、往々にして好ましくない国家のシンボルとしてつばをかけられたり焼かれたりすることもある国旗とは異なり、自由の女神は、政治的イデオロギーを超越し、しかも希望や民主主義、自由、法の下での平等を示すものであり、万人に愛されるものである。それ故、自由の女神の爆破行為は非難の対象となったのである。

その 11 日後にはマサチューセッツで同様の爆破事件がありその時から、自由の怪人の名で、“‘Wake up, America,’ . . . It’s time to start practicing what you preach. If you don’t want any more statues blown up, prove to me that you’re not a hypocrite. Do something for your people besides building

them bombs. Otherwise, my bombs will keep going off. Signed : The Phantom of Liberty.” (242-3)と、アメリカに対し偽善をやめ、爆弾を作り戦争をすることをやめるよう声明が出される。テロリストの声明文とは異なり独断的でも一方的に無理な要求をするわけでもなく、“Democracy is not a given. It must be fought for every day, or else we run the risk of losing it.” (243)のように、多くの人々がすでに感じていたことを聖書の預言者のように語ったものであり、この声明以後、自由の怪人は、社会にたいする脅威と見なす批判的な見方よりもむしろ共感を呼び大衆のヒーローと見なす見方が出始め、社会現象化すらし、教会の説教や新聞の社説で取り上げられる。自由の怪人Tシャツやバッジまで販売される。Sachs自身、自分が社会に与えた影響の大きさに驚く。

1989年の春、Peterは天安門事件で中国の民主化運動の学生たちが、天安門広場に自由の女神のレプリカを作りそのペールを取っている場面をテレビで眼にすると、改めて自由の女神の持つシンボルとしての意味と力を知ることになる。そして「怪人がその意味を復活させるために重要な役割を果たしていた」(245)ことに気づき、怪人によって火をつけられた世界の新しい動きを実感すると同時にSachsのことを思い浮かべたのである。

Sachsは帰宅した別荘で偶然Peterに会いすべてを話した後、10ヶ月生きて自分を含め誰も怪我人がでないように、また足跡を残さずに町を去ることに細心の注意を払いながら女神像を破壊し続けた。その間、“The world went through extraordinary changes in those ten months. The Berlin Wall was torn down, Havel became president of Czechoslovakia, the Cold War suddenly stopped.” (266)とあるように東欧で共産主義体制が崩壊し、世界は大きな変革の波に飲み込まれる。結局彼は、1990年6月28日にウィスコンシンで自爆し、奇しくもThoreauと同じ44歳で死亡する。それは落下事件後、再生し再上昇しようと足掻いていたSachsの最終的な落下であった。

ここでメッセージ性を持った爆弾テロリストとして、Sachsと共通点があり、自由の危険性を体現する実在のテロリストとして、The Unabomberについて言及したい。通称The UnabomberとよばれるDr Theodore John Kaczynski (1942~)は、1942年にシカゴで生まれ、飛び級をしてハーバード大入学、ミシガン大学で博士号を取得し、25歳でパークレーの助教授になった数学の天才であった。しかし2年でパークレーを辞めると、Thoreauよろしくモンタナ州リンカーンの人里離れ、電気も水道もないところに小屋を建てて住み始める。ここで彼は爆弾を作り、1978年から1995年にかけて16回の爆破事件を起こしていく。攻撃の対象が大学か航空会社であったことから、University and Airline Bomberを略してThe Unabomberと呼ばれた。後期の爆破では3名の死者も出ている。彼は爆弾にFCというイニシャルを残していたが、これは後にFreedom Clubの略であることが明らかになり、彼もまた彼なりの自由の探求者であったことが明らかになる。

1995年に彼は、*The New York Times*と*The Washington Post*にUnabomber's Manifestを送り、こ

れを掲載するなら爆破は辞めると宣言する。それを載せた両新聞社は非難されたが、それがきっかけとなって、Kaczynskiは逮捕されたのである。マニフェストは、産業革命がいかに人間に破滅をもたらしたかというメッセージから始まる。書き出しの部分は以下の通りである。

1. The Industrial Revolution and its consequences have been a disaster for the human race. They have greatly increased the life-expectancy of those of us who live in "advanced" countries, but they have destabilized society, have made life unfulfilling, have subjected human beings to indignities, have led to widespread psychological suffering (in the Third World to physical suffering as well) and have inflicted severe damage on the natural world. The continued development of technology will worsen the situation. It will certainly subject human beings to greater indignities and inflict greater damage on the natural world, it will probably lead to greater social disruption and psychological suffering, and it may lead to increased physical suffering even in "advanced" countries.

以上のように、彼はテクノロジーの進展が、自然界にダメージを与え、それが社会や人類に悪影響を及ぼしていることを主張している。Thoreau達から始まり、1960年代以降Rachel Carson等により進められてきた環境保護運動は、最近のシーシェパードなどに顕著に表れているように、FBIやScotland Yardのテロリスト指定団体に名を連ねている過激な環境保護団体も出現してきている。*Leviathan*の中で、Dimmagioが製材所の関連施設を爆破し、環境破壊者に対して手段を選ばず抗議していたのにも似ている。

Paul Austerの*Leviathan*が出版されたのは、1992年なので、その際にはまだThe Unabomberの正体は明かされていない。犯人の候補には、Thomas Pynchonのような作家も挙がっていたようである。連続爆破という点や、マニフェストを出して、現代世界が如何に多くの矛盾を抱え、多くの人々が苦しんでいるか訴え、ある一定層の共感を得ている点、また少なくとも当初は死者が出ていなかった点など、Sachsの自由の女神連続爆破事件と共通する点も多い。しかしSachsは絶対に死者はもちろんのこと負傷者を出さないことに心を配っていたのに対して、The Unabomberは3名の死者を出しているし、余りにも独りよがりの主張であったために広く大衆の支持を受けることはなかったなど大きく異なっている。また、いわゆるディープエコロジーが、地球を救うことを第一に考え、人間中心的な考えをとらないのに対して、Sachsにとって、もっとも優先すべきことは、人間にとっての自由なのである。

落下事故を契機として生き方の転換期を迎えたSachsは、個人から自由を剥奪しつつあったアメリカという国家に立ち向かい、また如何に個人の自由が奪われた状態にあるのか人々に広く知らしめるために、紛う方なき自由の象徴であるThe Statue of Libertyのレプリカを爆破するという手段をとったのである。自由の女神本体ではなくレプリカを爆破したのは、彼にとってはアメリカ自体が、紛い物・偽善と化したことに対する批判があったのであろう。Sachsの行

為は、個人の自由を守るため、国家に対して国家のシンボルの破壊行為を仕掛け、自由を奪おうとする巨大な権力である国家に反旗を翻すと共に、国民に対して真の自由が脅かされている現状を訴え、共感を呼び起こそうとする自らの命をかけた試みであったのだ。

参考文献

- Auster, Paul. *Leviathan*. New York: Penguin Books, 1992.
----. *The Art of Hunger*. New York: Penguin Books, 1997.
- Baum, Charlotte., Paula Hyman, and Sonya Michel. *The Jewish Woman in America*. New York: New American Library, 1977.
- Bloom, Harold. Ed. *Paul Auster*. Bloom's Modern Critical Views. Philadelphia: Chester House Publishers, 2004.
- Brown, Paul. *Paul Auster*. New York: Manchester University Press, 2007.
- Dennis, Barone. Ed. *Beyond the Red Notebook: Essays on Paul Auster*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1995.
- Dimont, Max. I. *The Jews in America: The Roots, History, and Destiny of American Jews*. New York: Simon & Schuster, 1978.
- Guttman, Allen. *The Jewish Writer in America*. Oxford: Oxford University Press, 1971.
- Hollander, John. Ed. *Emma Lazarus: Selected Poems*. New York: The Library of America, 2005.
- Lazarus, Emma. *Songs of a Semite; The Dance to Death, and Other Poems*. General Books, 2010.
- Schor, Esther. *Emma Lazarus*. New York: Schocken Books, 2006.
- Zinn, Howard. *A People's History of the United States: 1492-Present*. 1957. New York: Harper Collins Publishers, 1999.
- 小田基. 『「自由の女神」物語』, 晶文社, 1999.
- ギテルマン, ツヴィ. 池田智訳, 『葛藤の一世紀 —— ロシア・ユダヤ人の運命』. サイマル出版, 1997.
- ノートン, メアリー・ベス. 本田創造監修, 『アメリカの歴史6 — 冷戦体制から21世紀へ』. 三省堂, 1996.
- 浜野喬士. 『エコ・テロリズム — 過激化する環境運動とアメリカの内なるテロ』. 洋泉社, 2009.
- 長尾龍一. 『リヴァイアサン — 近代国家の思想と歴史』. 講談社, 1994.
- 『哲学事典』. 林達夫他監修, 平凡社, 1971.